

逃げる (NIGERU)

by Ryoya Naito

SYNOPSIS: It was Sho who talked about the legendary swordsman, Musashi Miyamoto to me. He had Filipino father and Japanese mother. He hoped to live like Musashi, and saw through the essence of the mentality of Musashi as a warrior and tactician. "No matter what happens, run away and away," "someday when you have a chance, you can win," and "I have learned from Musashi Miyamoto" he would say. Now I, one of his friends, have also chosen a life of "running away and away" like Sho, influenced by a book that I read when I was a high school student. Giving up hunting a job after graduation from my university, every day, I spend time observing our society from a distance via any media. But one day, an unknown virus that suddenly spreads throws us into the world of chaos. Even though I am entangled in the virus convulsion, I am still thinking of how to run away, reflecting on the radical student movement from 50 years ago, the Hong Kong protest, the BLM movement, the Mauritius oil spill, those who were not able to run away from such problems, and the one, Sho, who I have never seen since he changed his school 13 years ago.

武士道にも逃げ道はちゃんとある。

そう僕に教えてくれたのは、写真の中の十一歳の男の子だった。名前はショウ。真新しい小学校の校舎を背景に笑っている。黒い髪に浅黒い肌、大きな目と綺麗に並んだ歯、白っぽい手のひら、草臥れたナイキのシューズ。ショウはフィリピン人の父親と日本人の母親を持つ混血の男の子。彼は日本で最も有名な剣豪・宮本武蔵のファンで、『五輪書』だとかコンビニ売りのムック本だとか、そういったのを毎日学校に持ってきては、休み時間ごとに開いているような子どもだった。

そしてその頃は僕もまた、彼と同じように子どもだった。写真の中のショウの隣で、ぎこちなく微笑んでいるのが十一歳の僕。でも僕は彼と違って、もっと平凡でつまらない子どもだった。彼みたいに何かに熱中していたわけでもなかったし、ほかの生徒と比べて勉強もスポーツもそれほど得意じゃなかった。



けれど僕とショウはとても仲が良かった。彼は小学三年の頃に転入してきた転校生だったが、すぐに打ち解けて仲良くなった。彼は博識で多弁だったし、物怖じせずに色んなことを口にした。だから、話すことより聴くことのほうが得意だった僕は、毎日の帰り道でショウの話を聴くのが大好きだった。要するに、ウマが合ったのだ。

彼について、僕は今でもよく憶えている。

彼が、「武士道にも逃げ道はちゃんとある」ということについて僕に語ったのは、ある夏の放課後のことだった。

そのころの僕らは、毎日昼休みになるとドッジボールをして遊んでいた。——ドッジボール、最近では非人道的な遊戯として名高いが、このころはまだそんなことは誰からも言われていなかった(少なくとも僕の周りでは誰もそんなことを指摘する者はいなかった)。

この日、僕とショウは、コートの中で敵同士だった。ゲームが始まって数分経った頃には、すでに彼の所属していたチームのほうがやや劣勢になっていた。とても暑い夏の日で、校庭の砂が旋風で巻き上げられるたび、汗ばんだ肌に細かな砂が付着して、泥のように溶けていくのが感じとれるくらいだった。

味方側の外野からミカサのバレーボールが飛んできた。ボールは風に少し煽られると、奇妙な軌道をたどって僕のもとへやって来た。僕はそのボールを胸に受け、すぐさまそれを敵陣のプレイヤーに叩き込むため身構えた。ショウが陣地の真ん中あたりにいて、砂で足を滑らせているのが目の端に見えた。僕は身体の向きを変えると、まだ発達しきっていない小さな手で、ショウの肩のあたり目掛けてボールを思い切り投げた。しかし彼は、身を軽くよじり、それをいとも簡単にかわした。彼は笑っていた。僕は呆気にとられながら小さく舌を鳴らし、外野へ飛んでいったボールを目で追った。それからボールを手にした外野のメンバーに改めて自分にパスを出すよう叫んだ。外野が上のほうにボールを放った。大きなアーチを描いて、ボールはまた僕に回ってきた。僕は再び、近くにいたショウを狙った。今度は足元。僕は数歩の助走をつけ、ショウの履いているナイキのロゴ・マークに向けてボールを放った。直線的な鋭い軌道。当たった！僕はそう確信した。しかし現実に僕の目に映ったのは、ショウが身体を前につんのめらせるようにして足を浮かせ、まともやボールを避ける姿だった。まるで無重力の中にいるような、軽やかな動きだった。ボールが空を切り、砂埃をあげながらショウの背後へ転がっていった。彼は両手を地面につき、腕立て伏せをするときのような恰好になっていた。しかしすぐに反動をつけて身体を起こすと、曲芸師さながらの動作で身を翻し、外野のほうをくると向いてボールの動きを目で追った。

そのあと何度やっても僕はショウにボールを当てることができなかった。彼はいつも踊るみたいにしてボールを避けた。彼は自陣に自分ひとりしかいなくなっても、いつまでもボールを避け続けた……。

誰が何度彼を狙っても、ボールは掠りもしなかった。ショウだけが残ると一日がかりでもゲームが終わりそうにないな、と誰もがそう口にした。

その日の帰り道、僕はショウに、「どうしてあんなに避けてばかりなんだ」と訊ねた。「避けてばかりじゃ、いつまでも勝てないよ」

彼は、不思議そうな目で僕を見た。

「何があっても、逃げて逃げて、逃げまくるんだ。それが大事なんだ」とショウは僕を見ながら言った。「とにかく負けないことが大事だ。そのうちチャンスが来れば、勝つことだって出来るさ」

それから彼は、宮本武蔵の話をはじめた。

「僕は宮本武蔵からそれを学んだんだ。宮本武蔵のことを卑怯者だっていう人もたくさんいるし、確かに彼には色んな俗説がある。自分より強い者とは決して戦わなかったとか、卑怯な手を使って相手を倒したとかさ。『逃げるが勝ち』という言葉を残したのは武蔵だって言う人もあるくらいだ。でも僕は、それでも武蔵は凄いなと思う。だってどんなずるをしてでも生き残らなきゃ、とにかく勝つことにはならないんだから」

その時の僕には、彼の言っていることの半分もわかっていなかった。けれどいまならわかる。確かにその通りだ。宮本武蔵という侍は、そのようにして血生臭い時代を生き抜いた。多くの血が流された。彼以外の血だ。

ショウの言った言葉と似た文章に、僕は高校生になってから出会った。

一九六九年に出版され、当時の日本の大学生たちに広く愛読された庄司薫の『赤頭巾ちゃん気をつけて』という本の中に、「逃げて逃げて逃げまくる方法」という文章があった。それによれば、自分にとって重要な問題から逃げ、もし逃げ切ることが出来れば、それは逆説的に重要ではなかったことになる、というようなことが書いてあった。僕はそれを読んで、「なるほど」と思った。ならば僕も逃げて逃げて逃げまくろう。あらゆる責任や義務から逃れ続けよう。何かにとらえられてしまうまで、とにかくエスケープしよう。そう思った。

この本が出版された五十年前といえば、安保闘争だとかの学生運動が非常に盛んな時期で、日本中の学生たちが懸命に社会に対する反発を強めていた時代だった。権力や権威に異議申し立てを行い、デモやバリケード封鎖が日常的に行われ、警察と学生が暴力の渦を生み出し、何人かの命が失われてしまったりもした。彼らは当

時の社会における「問題」にとらえられた。逃げ切ることができずに、結局戦いにも敗れた。この国は変わらなかった。少なくとも良い方向には。そして現在……。

○

僕はずっと、自分に降りかかってくるあらゆる問題から逃げ続けてきた。逃げるというのは僕の人生の重要なモチーフになっていた。社会において起こるあらゆる現象は、写真や液晶画面のなかで起きている別の世界の話であるような気さえしていた。

僕は大学院を卒業し、無職の男になった。食費などは両親の世話になっている。世間では、僕のような人間のことをニートだとか寄生虫だとかクズだとか呼ぶ。しかしそれは大いに結構だった。僕はとにかく、面倒な問題から出来るだけ長く逃げられれば、それで良かった。そしてお父さんお母さん、本当にいつもありがとう、と唱え続けてさえいれば良かった。

二〇二〇年の初頭から世界中に蔓延しはじめた「COVID-19＝新型コロナウイルス」は、僕の逃避を手助けしてくれた。僕が就職活動を活発に行えない大義名分や新しくアルバイトをはじめることができない言い訳を、突如として現れた(と思われる)この奇妙なウィルスは与えてくれた。しかし同時に、いくつかの重要なものを我々から奪っていった。

日本で新型コロナウイルスの影響が顕著になっていった四月、日本全土に緊急事態宣言が発出された。目に見える変化が起きた。まず街の様子が完全に変わった。人はほとんど出歩いておらず、多くの商店は政府からの「休業要請」に従って店を閉めていた。僕の両親は、街にある眼科の中で小さな眼鏡店を営んでいるのだが、眼鏡をつくる客はおろか、眼科にさえ患者がほとんど来ないということだった。毎日のように「病院巡り」をしていた老人たちでさえ、その姿を消したのだ(それはこの国にとってとてつもない一大事を意味する)。それからTV番組の多くが過去に制作されたものの再放送に切り替わった。僕が楽しみにしていたアニメも制作が一時中断され、往年の名作が再放送される運びとなった(それはそれで悪いことではなかった)。それと並行して、僕が楽しみにしていた映画の多くは軒並み上映延期され、『ジョゼと虎と魚たち』だとか、ずいぶん長いこと待ちわびていた『ヴァイオレット・エヴァーガーデン』の劇場版作品だとかのアニメーション映画もほとんどすべていつ観られるかもわからない状態になった。その代わりにいくつかのスタジオ・ジブリ作品がリバイバル上映されることになったとはいえ、それは僕の心に大きなダメージを与えたものだった。それに一年以上楽しみにしていたザ・1975

のニュー・アルバムの発売が一か月延期されてしまったし、僕が一所懸命書いた修士論文に対する評価として修了式で堂々と受け取るはずだった学位記は、薄っぺらで味気ないレターパック・プラスに入って速達で送られてくる始末だ。

そして言うまでもないことだが、このウィルスによって、大勢の人間が死んでしまった。

二〇二〇年がはじまり、それから夏になるまでの間に、人々の醜い部分が次々と顕わになり、この国を、あるいはこの世界について、悲観的に捉える人ばかりが増えた。

東京五輪は延期になった(いまのところは、ということになってはいるが……)。日本でのオリンピックが延期、あるいは中止になるのは、これで二度目だ。あの悲惨な大戦の直前、一九四〇年のオリンピックが中止になって以来のこと。これで東京でのオリンピックが上手くいったのは、一九六四年の一度きりということになる。野球の打者で言えば、打率三割三分三厘。そう考えれば、かなり良い数字だ(野球の話であれば)。

おまけにただでさえ弱体化して久しいこの国の経済は、完全に停滞してしまった。

何てことだ！

○

僕はこの奇妙で不気味なウィルスのことを憎んだ。そうせずにはいられなかった。しかしすぐに自分を律し、憎むことをやめるよう努めた。実を言うと、僕はもうずいぶん前から、自分の中の憎しみをコントロールする術を身に付けていた。僕は何かを恨んだり憎んだり呪いたくなったりしたとき、いつもカート・ヴォネガットのことを思い出すようにしている。そう訓練してきたのだ。それは実に効果的だった。少なくとも僕にとっては。

カート・ヴォネガットが一九七八年にニューヨーク州立大学で講演を行ったとき、彼は第二次世界大戦でのヒトラーの例を挙げながら、憎悪が引き出すエネルギーの大きさについて嘆いた。憎悪が人間からもっとも大きなエネルギーを引き出すことは、人類にとって「悲劇的なことかもしれない」というようなことを彼は述べた。そして次に、現代の若者が大人たちの目に無気力であるように映るのは、若者たちが「憎悪なし」で何とかやってみようと思っているからだというように言い加えた。

僕はこの講演録に触れたときから、何かを憎むことをやめようと誓った。いや、結局は完全にやめることは出来なかった(なにせこの講演が行われて四十年以上たっ

ているのに、世界に憎悪は蔓延ったままであり、いまだそれが我々から引き出すエネルギーの量は太陽系じゅうの火山活動にも匹敵するほどなのだ)。それでも少しは憎悪やそれに起因する怒りの感情を抑えられるようにはなった。僕はカート・ヴォネガットの読者に、戦争を望む者はいないとさえ思う。本当に。

これと似たようなことを、日本で最も偉大な小説家のひとりである安部公房が、その著作、あるいは渡辺格という分子生物学者との対談のなかで話していた。彼は対談のなかで、確かテヘランにおける爆撃の惨禍をニュースで目にしたと語っていた。彼の眼前にあるTV画面に映し出されていたのは、テヘランの街が瓦礫と化している姿だった。そこで彼は、瓦礫となった戦場に一冊の本が落ちているのを見つけた。それはドストエフスキーの本だった。彼はドストエフスキーを読むような人間が、人種や宗教間での争いの中で死んでしまったことに思いを馳せ、「非常につらかった」というようなことを述べた。

僕は彼のように偉大でもなんでもないが、同じようにそう思う。完全に同意見だ。ドストエフスキーを読む人間が、そのような争いごとに巻き込まれることは非常に酷なことだと思し、それと同じように、カート・ヴォネガットを読む僕のような人間が、どんな場合であれ、簡単に憎悪を抱くわけにはいかないはずだ。たとえ突如として出現した小さな小さなウィルスに、生活における多くの大切なものを破壊され、手も足も出せぬまま好き放題蹂躪されたとしても。

それに、憎悪によってこのウィルスがどうこうなるわけでもない。

○

僕は新型コロナウイルスの影響でほとんど外出ができないあいだ、とにかく本を読んだ。それから時々、インターネット上で配信されている映画やアニメを観た。本を読んでいるのは楽しかった。色々を読んだ。ジョン・アーヴィングだとかジュンパ・ラヒリだとか、あとは去年途中まで読んで放り出していたミシェル・ウエルベックの『セロトニン』だとか、五年以上前に買って読んでいなかったトム・ジョーンズの『コールド・スナップ』だとか……。『ライ麦畑でつかまえて』も久しぶりに読み直した。僕はそれを読みながら、以前大学の友人がホールデン・コールフィールドのことを「逃げてばかりの男」だと言っていたのを思い出した。確かに、彼は何度となく学校を退学になったりしてドロップアウトを繰り返しているようだったし、そのことを両親に知られたくないために色々気を回しているところなんて、読む人によってはみっともないと思われたって仕方ないだろうなと思った。でも僕は彼の行動を単なる逃避と断じてしまいたくはなかった。その理由はよくわからない。しかし少なくとも、あのホールデンでさえ、今の僕よりはるかに立派であることは間違いない。なぜなら、二十代の男がふらふら家の中を歩き回っている

のと、十六歳の少年(あるいは青年)が都市を彷徨しているのとでは、雲泥の差があるに違いない。

映画に関しては、あらゆる配信サービスにずいぶん世話になった。本を読んでいるときは、ずっとノートPCで何かしらの動画を見ていた。何を観たか? 色々見過ぎてよく憶えていない。『シャイニング』とか『AKIRA』、あとは『ダンサー・イン・ザ・ダーク』あたりを観た気がする。あとはなんだったか。古いアニメを観た。

本も読まず、映画も観ていなかったとき、僕はようやくTV番組を見た。

一時期、TVのニュース番組でWEBインタビューを受ける人たちのことを何度か目にした。彼らは、「友達に会えなくて寂しい」というようなことを異口同音に話していた。僕はそのインタビューを見て、ずいぶん悲しい気持ちになった。なぜなら僕には、「会えなくなって寂しい」と思えるような人すらいなかった。まさかこんな形で、自らの孤独が浮き彫りになるなんて思いもしなかった。世の中がこんなに会いたい人間がいる人たちで形作られているなんて……。まあそんなことはどうだって良い。

そんなわけのわからないインタビューや新型コロナウイルスの感染者数に関する何やかやの他に、まともなニュースはほとんどなかった。ただひとつ、僕の意識を画面に集中させたのは、香港に関するニュースだった。香港国家安全維持法に関連するニュースが流れるたび、僕は二〇一九年のデモの映像を見ることになった。香港に生きる若い人たちを中心に、巨大な群衆が通りを埋め尽くし、強い連帯の姿勢を見せていた。今やこのような人の集まりさえ、希少性の高いものとなっている。ほんの一年ほど前には確かに存在していた巨大な群衆を、僕は見つめた。それはまるで、精緻なブリリアントカットを施されたダイヤモンドのようにさえ見えた。

香港に関するニュースのさなかで、デモを行う若者たちと警察部隊との衝突の映像もたびたび目にした。そのたびに僕はひどく緊張した。大きな人々の塊のあちこちで、散発的な、あるいは極めて集中的な暴力があった。その様子はまるで異物を排除する人体の免疫作用のようだった。互いに互いを異物と信じあっているのだろうか。僕はそう考えて、ずいぶん複雑な気分になったものだった。

僕は香港のデモの映像を見ながら、彼らもまた逃げるができなかったのだ、と思った。彼らだってこのようなことを進んで行いたいとは考えていなかったはずだ。争いや暴力を恐ろしいと思い、出来ることならそんなものの一切から逃れたかったはずだ。しかしとらえられてしまった。彼らは彼らの問題に向き合わなければならなかった。立ち向かわなければならなかった。

初夏になると、新型コロナウイルス以外のニュースもちらほら見られるようになった。アメリカでは黒人男性が警察に首を圧迫されて亡くなったことを発端として、

大規模なデモが行われていた。感染症の拡大を防ぐには不適切な行動だが、いずれにせよ、人間の生命に関する問題なのだから僕が口を差し挟む余地はない。その問題から逃げることもまた、生命におけるある種の危機を意味する。

それにレバノンの大爆発。あれにはちょっとびっくりした。本当に、大爆発だった。TwitterやTVで、いくつかの写真や映像を見た。あの爆発について、「まるで原爆みたいだった」と表現した人もいたくらいだった。確かにそうかもしれない。規模はいささか小さいにしても、逃れようがないという点において、広島的、あるいは長崎的惨禍だった。そしてまたしても大勢の人が、逃げることもできずに、死や痛みにとらえられてしまった。

僕はレバノンの爆発をニュースで見ているとき、不謹慎にもキッチンでクリームコロッケを作っていた。僕はクリームコロッケに関するちょっと面白い話を知っている。クリームコロッケを作ろうとした外国人が、液状のクリームにどうしても衣をつけることが出来ずに困り果ててしまうというものだ。本当にあった話かどうかは知らない。でもあり得る話だろうとは思ふ。クリームコロッケを作るときに大事なものは、中のクリームをあらかじめ冷やして、ある程度固めておくことだ。それではじめてクリームに衣をつけることが出来る。僕はこれを「現代におけるコロンブスの卵」と呼んでいる。それともうひとつ大切なのは、クリームを冷やしているぶん、油の温度に注意することだ。一八〇度くらいの温度でなければ、コロッケは破裂し、爆発してしまう。そして恐らく間違いなく、あなたは火傷することになる。その運命から逃れたくば、油の温度は一八〇度くらいに保て。以上。

それから、インド洋のモーリシャス沖に日本企業の馬鹿でかい船舶が座礁し、重油を垂れ流している様子もよく目にした。何てことだ、率直にそう思った。綺麗な海に、太くてどす黒い帯が流れていた。海流はその重油をモーリシャスの岸辺に運び、美しい砂浜を汚した。まったく、何てことだろう。取り返しのつかないことだ。何せそこに棲む珊瑚や、珊瑚を住処にする魚たち、そしてそこで暮らす人々は、どう足掻いてもそこから逃げられない。もし戻せるものなら時間を戻してやりたい。けれどそれは不可能だ。起こってしまったことに対して、これ以上ひどくならないように何とかするしかない。

それに夏のあいだは感染症だけではなく、熱中症でも大勢の人が病院送りになった。何人かは死んでしまった。悲しいことだ。太陽は我々の真上にあり、それが存在しない人生など今のところありえない。それは数えきれないだけの恵みをもたらすと同時に、我々を痛めつけるだけの厳しさをも持つ。でも太陽からは誰も逃れることなどできない。熱中症に関しては、とにかく夏の終わりを待つしかない。

しかし夏が終わろうとも、この奇妙な感染症は終わらない。

○

家に籠っているあいだ、TVを観るのにもいよいよ飽きて、僕は部屋の掃除をはじめた。滅多にないことだ。記念的なこと。だからここに記しておこう。

僕は床を雑巾で拭き、机の上のものを片付け、部屋の本を整理し、電燈の笠を洗い、机の中のを一度すべて取り出して、必要なものと不要なものに分けて、不要なものは月曜日に燃えるごみとして出した。

掃除をしている最中、机の奥からショウの写真が二葉出てきた。一枚は、十一歳の頃のショウと僕の写真。これはふたりで写っている最後の写真だ。なぜなら彼は、小学六年にあがる直前に、東北の小学校に転校してしまったから。そしてもう一枚の写真は、厚手のコートを羽織った彼が、雪の降る海岸でジャンプしているところを収めたものだった。その写真の裏には、「いつかまた遊ぼう」と黒のマッキーで書かれていた。それを見た僕は掃除の手を止め、思わず微笑んでしまったものだった。

正直な話をすると、ショウが転校してしまっただけでなく、僕は彼のことをあまり思い出さなかった。日々多くのことが起こったし、僕はそれに対処していくので精いっぱい、彼に手紙を書いたりもしなかった。やがて互いのやりとりも完全に途絶えてしまった。それからはもうまったく、彼のことを思い起こしもしなかった。

僕が彼のことを久しぶりに思い出したのは、二〇一一年のことだ。その年の三月十一日、東北で地震が起き、巨大な津波が沿岸部の街を襲った。ショウが転校した学校のある地域が被災しているのをTVで見て、僕はまっさきに彼のことを思い出した。ショウは無事だろうか、と僕は心配した。しかし次の瞬間には、彼なら大丈夫だと半ばそのように確信していた。彼は逃げることにかけては一流なのだ。彼ならきっと、あの傍若無人な津波からだって逃れることが出来たはずだ。僕はそう信じた。

それから毎年、三月十一日になると彼のことを思い出した。ショウならきっと逃げ切ったに違いない。その日が来るたびに僕は祈るような気持でそう思った。そして今だって彼は、あの小さな小さなウィルスからも上手く逃げのびているのだろう。あの奇妙なウィルスにとらえられてしまわないよう、逃げて逃げて、逃げまくっているはずだ。僕はそう信じている。

いわばこのウィルスは、世界中を覆う巨大な、切れ目のない暗雲だ。所々で雷を起こし、人々の身体を打つ。我々は何とか、その雷から逃げようとしている。そう言う意味で、いまやこの地球に住むあらゆる人たちが逃避者だ。世界中を覆った暗



雲がもたらす雷は、いつどこで発生するか予測できない(『バック・トゥ・ザ・フューチャー』のドクも、そんなようなことを言っていた)。しかしそれでも逃げ続けなければならない。そして我々は、逃げながら、学習し、思考する必要がある。絶対の手段はなくとも、最善の手段くらいは見つけなければならない。逃げながら、それをやり遂げるのだ。僕だってそうするつもりだ(たとえば、このような文章を書いたりして)。

たとえば、もしショウがやっていたみたいに、軽やかに踊るようにして逃げる事が出来たなら、それは素晴らしいことだと思う。でもやはり、彼のように上手く楽しむことが僕に出来るかはわからない。たぶん不可能だろう。今はみんなシリアスだ。でもやってみるしかない。とにかく今は逃げ続けるのだ。そのための道は必ず用意されている。

そもそも道というのは、そういうものじゃないか？